

まちの情景と建築

田中 修一

日本編

看板・表示

文字をデザインに

灯籠／道標／提灯／杉玉

▼岐阜県郡上八幡市は吉田川の清流と郡上踊りの伝統が生きている町だが、



路地の角に御影石をくりぬいた街路灯がある。明るさを求めたものではなく、蛍のようなほのかな光に風情がある。

▶ご存じ浅草の雷門である。金龍山浅草寺(せんそうじ)と称し天台宗であったが、第2次大戦後、聖観音宗の総本山とした。門の歴史も古くAD942年の創建で、江戸期の再建では徳川家光が門の右・左にそれぞれ風神・雷神を配したことから正式には風雷神門と呼ぶ。1865年に焼失の後、1960(昭和35)年に松下幸之助が再建、その縁で大提灯はパナソニックが寄進している。



▶[杉玉]または[酒林さかばやし]と呼ぶ。酒造元で新酒が出来上がると、それを知らせる表示として玄関に掲げた。杉の葉をボールのように丸く仕立てる。杉の香りが魔除けにもなっているらしい。初めは青々としているが、枯れてくると酒も熟成が深まることを暗示している。

京都桂川沿いの松尾大社は近畿地方の山の棟梁オオヤマクイノカミを祀っているが、酒の神でもある。入り口の鳥居には来年の収穫を占うために12か月分の杉の枝を下げておく。葉の枯れ具合で作柄を予想するのだとか。写真は秋祭りで市が立っている様子。杉はすっかり枯れているがはたして来年の実りはどうか。



◀切り絵作家として有名な、栃木県那須にある藤代清治美術館。おとぎの国を描くばかりではなく、東北大震災の被災状況や福島原発の脅威を実地に調査して、心の思いを風景に溶け込ませた作品などもある。黒い紙をベースに色とりどりのフィルムを駆使して、光を透過した作品はファンタジックな映像の世界だ。

美術館は自然の地形をそのまま残した林の中にあるのだが、敷地入口のアプローチの塀の上に切り絵の動物や天使がお出迎えている。これから始まる光と影の世界にいざなう演出効果が抜群だ。なまじの言葉はいらない。絵を見て、訴えたい意味を理解してほしいと来訪者に話しかけている。